様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３４５１７
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０９２９

研究課題名（和文）モノにみる現代日本の生活文化と歴史の発掘とその活用に関する研究

研究課題名（英文）Finding and its use in modern Japan living culture and history through things

研究代表者
横川　公子（YOKOGAWA, Kimiko）

武庫川女子大学・生活環境学部・名誉教授

研究者番号：５００９０９２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：　モノを通して、モノと人間とのアクチュアルな関係性を発掘するために、地域の人々を巻き込んだミュージアムサロンを、３つのテーマ「粗品」「飾り物」「贈答品」をめぐって、６回実施した。
　その結果、とくに主婦に代表される地域の一般の人々のモノに寄せる視線と価値付けの内容から、「豊かさ」や「幸福感」に関する暮らしの現場の想いや思想を炙り出した。同時に、高度に産業化･情報化を遂げた現代社会が直面する価値の限界や歪みが示唆された。さらに地理的伝統的条件に根差す地域的類型を炙り出すことができ、現代の先端的課題としてのグローバルに対するローカルな文化意識の提案にもつながった。

研究成果の概要（英文）：Through Mono, engulfed the people of the region to discover the actual relationship between human and Mono, Museum Salon conducted 6 times over the theme of the three "soshina", "gifts" "ornaments". As a result, from the contents of the eye on people especially housewives who represented regional products and value life about "richness" and "euphoria" of thoughts put out roasted thought. Suggested limit value that face modern society at the same time, highly accomplished industrialization and informatization and distortion. You can brainstorm rootedness in addition to traditional geographical regional typology, as leading-edge issues of modern led to the proposal of local cultural awareness for global.

研究分野：生活美学・民族学

キーワード：生活財悉皆調査　生活意識　ミュージアムサロン　粗品　飾り物　贈答品　地域生活　主婦

１．研究開始当初の背景

(1) 生活財（生活するうえで必要なすべての物）に注目した先行研究として、古典的な今和次郎の考現学、これを発展・拡大させた商品科学研究所＋CDI による『生活財生態学－現代家庭のモノとひと』(1980)、『生活財生態学Ⅱ－モノからみたライフスタイル・世代差と時代変化』(1983)、『生活財生態学Ⅲ－「豊かな生活」へのリストラ』(1993) が報告されている。これらの検討は、モノを通して現代家庭のライフスタイルとその直面する課題を明らかにする上で大きな成果を挙げている。さらに、暮らしを構成する実在の生活財の全容をもって再現された「2002 年ソウルスタイル－李さん一家の素顔のくらし－」(国立民族学博物館企画展示、2002.3.21～7.16) があげられる。前者・CDI らの取り組みは、モノの量的把握を目指したもので必然的にモノの価値や意味について充分に接近しえないという課題を提示している。後者は本研究にとって興味深いものであるが、フィールド調査や聞き取りが困難で言語的な制約もあって、暮らしの価値的な側面、とりわけ生活の美学や思想、感性に関して、一般的な機能の把握を超えた探求に困難が横たわっている。

(2) さらに、国立民族学博物館共同研究（代表：横川公子・笹原亮二、2002～2004）「モノに見る生活文化とその時代－国立民族学博物館所蔵大村しげコレクションを通して－」、引き続き実施された、「暮らしにおけるモノと人との相互的関係に関する生活文化学的研究－国立民族学博物館所蔵大村しげコレクションをめぐって－」(代表：横川公子、2004～2006科学研究費基盤研究(B)による)では、随筆家・大村しげの著述と残されたモノと住居及び関係者からの聞き取りを拠り所とする共同研究を遂行し、モノと人との相互的関係に注目した暮らしの再現にほぼ成功している。

(3) 本研究は、上記(2)の取組にほぼ匹敵する大阪市美章園の町家の事例であるが、著述家・大村しげの言説に当たるテキスト資料はなく、それゆえに生活財とフィールドを対象とすることに加えて、一般の生活者の言説を収集するという、より多面的で一般的・総合的な検討が要請されることを特徴とする。一般の生活者の記憶と体験を通して生活の価値にせまろうとする実体的な提案は、意欲的で新たな実験的な研究ということができよう。

２．研究の目的

本研究では、モノを通して一般の暮らしの襞と思想の実体を探求し、モノと人間とのアクチュアルな関係性に立ち入ることで、モノの背後にある生活文化と歴史を明らかにすることを目的とする。大阪市美章園の町家に遺された戦前から現在までの中田家コレクションは、元の所有者が日々の暮らしの中で蓄積した生活財のほぼ全容を以て構成される。コレクションには、モノのみでなく家計簿・贈答メモなどの多くの言説のみならず旧住居も残されており、関係者へのインタビュー及び同時代の一般人の参画の仕組みを作ることで、現代の普通の暮らしが投げかけている実体的な思想を明らかにすることを目指す。

予想される結果と意義は、生活財の量的把握を超えうる独自の視座と方法論の確立が予想されること、個人の生活の実体的な価値の形成とそのあり方が明確にされ、現代生活の新しい意義付けを提言することが見込まれること。また前段の国立民族学博物館における調査研究と相互補完的な成果になることが予想される。

３．研究の方法

（１）大阪市美章園の町家に遺された戦前から現在までの中田家コレクションには、前述のようにモノのみでなく家計簿・贈答メモなどの多くの言説のみならず、旧住居も残されており、関係者へのインタビューの実施も今のところ可能であり、包み紙や取扱説明書等の情報、旧所有者のメモ書きなどを網羅して、モノの同定による全生活財の構造を分析すると同時に、これらを言説化・可視化してモノと人との関係性に迫る。

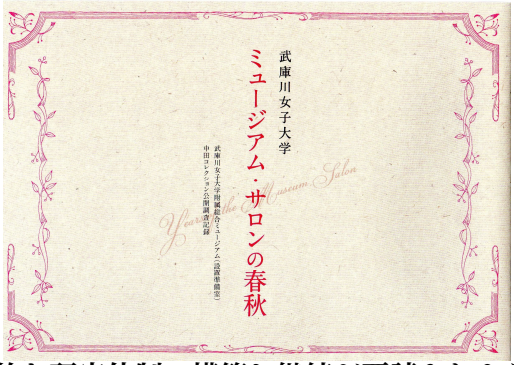
(2) 本研究の目的は、上述のように、モノを通して一般の暮らしの襞と思想の実態を探求し、モノと人間のアクチュアルな関係性に立ち入ることで、モノの背後にある生活文化と歴史を明らかにすることにある。そのため、研究者のみでなく普通の暮らしの担い手である一般人の参画の仕組みとしてミュージアムサロンを立ち上げることで、生活の実態に即した関連情報構築のための基本的な体制を整える。そのことによってモノをめぐる記憶と経験を発掘し、現代生活が孕む価値意識と範疇・限界を探り、展望する。

４．研究成果

（１）本研究で対象とした中田家コレクションの全品目リスト(17,225件)をほぼ完成させ、内容構成の見通しを得た。その結果、特徴的な中田家コレクションとして、いわゆる生活の基本的構成財としての衣・食・住に関する生活財以外に、多くの贈答品・粗品類の蓄積が明らかになった。これらが、主に昭和時代の暮らしの在り方を示唆するものとして、モノに付着する商品情報や包装紙等から読み取りが可能な情報化を推進した。

（2）ミュージアムサロンには、地域の一般人10人前後の参画と学生を中心とする若年層の参加を得、粗品・贈答品・家の中の飾りものをテーマとして、各2回ずつ計6回にわたり、記憶や体験を発掘しつつ、生活文化的な位置づけをめぐる語りを記録した。3年間に実施した1回あたり約2時間に及ぶサロンのテープ起こしと、それらについての打ち合わせ研究会の討論により、情報の確認と研究推進の方法を構築した。

（3）中田家コレクションの分析と収束によるミニ展示をサロンの開催ごとに実施した。その結果、収蔵展示によるアート空間の可能性など、有用なヒントを得た。今後の課題として、そのような展示実現に向けてのモノ情報の整理（コレクションに含まれるテキスト情報を含めて）と、その可視化のための蓄積が必要であり、さらに共同



的な研究体制の構築と継続が要請されよう。

（4）ミュージアムサロンでの語りの収集と、それらをめぐる研究会での討論によって、モノをめぐる生活の現場における思想や希望が抽出されつつある。その一部を中間的に小冊子にまとめた。

それによって、インタビューイである地域の中高年の主婦による、粗品・贈答・家の中の飾りに関する思想と暮らしの文化（価値観）の再現を実現した。それ自体些事である粗品をめぐっては、新しい時代の素材・プラスチックの日用品への応用や新規なデザインの提案がなされており、粗品がそうした新規さを暮らしに取り入れるきっかけになったことが表出された。中でもプラスチック製の計量カップのような便利そうな台所用品が見られ、新規の器具が暮らしに活用される試行錯誤のための格好の契機になったこと。さらに、その外観からはガラス器風な風合いや欧米型の貴族趣味的な表情が汲み取れること。また、そういうモノを使う暮らし方が提案されているともいえ、製作者の視線も含め、1970～1980年代の大衆的なあこがれが炙り出されている。また一見便利そうな器具の案出という発想が見え隠れする点も含め、粗品という細やかなモノであるからこそ横溢する、暮らしと時代の希望や表情が炙り出された。

さらに中田コレクションにはデパートの包装紙に包まれたまま遺されたモノが、粗品のみならず贈答品も大量に残されており、それらから読み取れる情報によって外出の場所が想定され、旧所有者の生活圏と行動パターンも見えてきた。また消費生活をかきたてるための流通上の仕掛けとして粗品が広く普及していたことも、社会・経済的な機能として分析すべき課題として浮上した。

家の中の飾りをめぐっては、伝統的な季節感の受容や年中行事の演出に加えて、日常の中で行われている多様な手作り作品の展示が大きな位置を占めていることが分かった。またそれらの飾りが地域や家族・親友などのコミュニケーションツールとして寄与していることも注目でき、その配置場所によって、来客に見せる外向きの飾りと、家族や自分のための内向きの飾りが意識されていることが示唆された。

贈答品については、社会的な交際、家族や親族・友人間の交流を反映する重要な仕掛けとなっているが、ポトラッチ的強制とは異なる多様なコミュニケーションのあり方が示唆された。さらに贈答品の内容には、百貨店を介した伝統的な贈答品にとどまらず、酒どころという地域に根ざした日本酒や釘煮といわれる早春の瀬戸内固有の佃煮の贈答品化のような、地域文化としての類型性も浮かび上がり、現代生活における贈答文化の検討を進める上で、有益な示唆が得られた。

（5） ミュージアムサロン参加者へのアンケートから見えてきたサロンの特徴は、①大学に入れる、学生とのおしゃべりは楽しい、②自分のことを話せるのがいい、③生活文化によりそうテーマの 3 点にまとめられる。①は、大学が会場である魅力に加えて「若い人と話せることで変わることがある」等、学生スタッフとの交流が楽しさの要素となっている。②では、調査への参加ということへの戸惑いや「話しを聞く側だと思って参加したが自分のことを話せて意外だった」という声があった。「自分のことを話せるのが楽しい」と多くの参加者がコメントしており、調査における語りが楽しさとなっている。③「なつかしことを思い出す」「生活に目を向ける気持ちが芽生えた」など、語りを通して、自らを振り返り生活を見つめ直す機会となっている。

アンケートの全体をみていくと、場所とは大学であり、中身とはコレクションを起点にした生活に密着したテーマと自分のことを話せる機会で、雰囲気とは世代間交流のあるゆるやかなコミュニケーションと捉えられる。

（6） 一人の女性が遺した生活財を媒介として、普通の暮らしを語りで再現しよう

とする試みは、コレクションの質的データを充実させると同時に、大学と隣接する一地域の生活文化を記録することになった。主婦の語りからみえてきた暮らしの営みが、大学が蓄積してきた研究や学問と重なることは意義深い。

生活者からデータを得ることによって生活文化や現代史を再構成していく実験は、サロンを重ねるごとに実態性を帯びてきた。しかも、研究者の視点のみならず、参加者にも生活研究への理解が共有され興味関心をよびおこしてきている。世代をつなぎ、学問と暮らしをつなぐ、この試みがもたらす学術的成果と地域貢献への期待は大きい。

参考資料：横川公子編 2014『武庫川女子大学ミュージアムサロンの春秋　中田コレクション公開調査記録』武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室発行

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　２　件）

① 佐藤優香・横川公子、大学博物館におけるミュージアムサロンの調査・教育・交流、国際学術会議研究大会「Museum 2015」、2015 年 01 月 15 日、明治大学神田学舎（東京都千代田区）

② 横川公子、中田家悉皆調査 調査報告、道具学会研究フォーラム、2013 年 01 月 27 日、武庫川女子大学甲子園会館（兵庫県西宮市）

〔図書〕（計　２　件）

① 横川公子編、ミュージアムサロンの記録、2015、155 頁、武庫川女子大学附属総合ミュージアム準備室

② 横川公子・佐藤優香・佐藤浩司・藤井龍彦・加藤ゆうこ・他 3 名、ミュージアムサロンの春秋、2014、60 頁、武庫川女子大学資料館（兵庫県西宮市）

〔その他〕
ホームページ等
学会ニュース（計１件）
①横川公子、中田家悉皆調査　調査報告、道具学ニュース、査読無、48 (2014)、2−3 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
横川 公子（YOKOGAWA, Kimiko）
武庫川女子大学・生活環境学部・教授
研究者番号：５００９０９２３

(2)研究分担者
井上 雅人（INOUE, Masahito）
武庫川女子大学・生活環境学部・講師
研究者番号： ６０３８８１８９

古野 貢（FURUNO, Mitsugi）
武庫川女子大学・ミュージアム準備室・事務長
研究者番号：４０３８２０２２

森 理恵（MORI, Rie）
日本女子大学・家政学部・准教授
研究者番号：００２６９８２０

村瀬 敬子（MURASE, Keiko）
佛教大学・社会学部・准教授
研究者番号：２０３１２１３４

佐藤 優香（SATO, Yuuka）
東京大学・大学院・情報学環・助教
研究者番号：４０４１３８９３

佐藤 浩司（SATO, Kouji）
国立民族学博物館・民族社会研究部・准教授
研究者番号：６０２１５７８８

藤井 龍彦（FUJII, Tatsuhiko）
国立民族学博物館・その他部局・名誉教授
研究者番号：８００４５２６０

(3)連携研究者
荒井　三津子（ARAI, Mitsuko）
北海道文教大学・人間科学部・客員教授
研究者番号：　２０４６８３０９